



Oracle® Essbase Studio

リリース 11.1.2.3.000

Readme

ORACLE
ENTERPRISE PERFORMANCE
MANAGEMENT SYSTEM

目次

目的	2
このリリースでの新機能	2
サーバー・プロパティ構成の更新	2
インストール情報	3
サポートされているプラットフォーム	3
サポートされている言語	4
サポートされているこのリリースへのパス	4
このリリースで修正された問題	4
既知の問題	5
ヒントとトラブルシューティング	11
ドキュメントの更新事項	17

目的

このドキュメントには、このリリースの Oracle Essbase Studio に関する重要な最新情報が記載されています。Essbase Studio をインストールする前に、ここに記載された情報をよくお読みください。

このリリースでの新機能

このリリースでのインストール、アーキテクチャおよび配置の変更内容に関する新機能については、Oracle Enterprise Performance Management System Readme のこのリリースの新機能に関する項を参照してください。

リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 から移行する場合は、累積機能概要ツールを使用して、これらのリリースの間に追加された新機能のリストを確認してください。このツールを使用すると、現在の製品、現在のリリース・バージョンおよびターゲットの実装リリース・バージョンを識別できます。1回のクリックで、現在のリリースとターゲットのリリースの間に開発された製品機能のハイレベルの説明のカスタマイズ・セットがすばやく生成されます。このツールはこちらにあります:

<https://support.oracle.com/oip/faces/secure/km/DocumentDisplay.jspx?id=1092114.1>

サーバー・プロパティ構成の更新

リリース 11.1.2.3 から、次の Essbase Studio サーバー・プロパティは Oracle Hyperion Shared Services Registry データベースに格納されています:

- `server.css.URL`
- `catalog.url`
- `catalog.password`
- `server.httpPort`
- `catalog.username`
- `catalog.db`
- `transport.port`
- `server.hss.bpmApplication`
- `server.datafile.dir`

11.1.2.3 Oracle Essbase Studio ユーザーズ・ガイドに、`server.properties` ファイルにあるすべてのサーバー・プロパティが説明されています。Shared Services レジストリの設定を表示または変更するには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide で説明されている `epmsys_registry` ユーティリティを使用します。

または、`server.properties` ファイルを作成して、そこに更新された設定を入力できます。これは、`server.properties` 内の設定で Shared Services レジストリに格納されている設定が上書きされるためです。

次のサーバー・プロパティは `server.properties` ファイルに追加できますが、Shared Services レジストリには設定されません:

- `server.timeoutPeriod`
- `server.queueSize`
- `server.threadCount`
- `server.sql.fetchSize`
- `server.tempDir`
- `server.charset`
- `server.readLockTimeOut`
- `server.writeLockTimeOut`
- `server.essbase.TPTapi`
- `server.essbase.disableDistinct`
- `server.runInBackground`
- `server.essbase.blindShare`
- `oracle.jdbc.ReadTimeout`
- `data-source-type.pool.maxsize`
- `data-source-type.cache.size`
- `server.essbase.uniqueMemberFromCaptionBinding`
- `catalog.pool.size`
- `server.jdbc.teradata.properties`
- `server.query.skipValidation`

注: サーバー・プロパティを `server.properties` に追加する前に、ファイルを作成する必要があります。テキスト・エディタを使用して `EPM_ORACLE_INSTANCE/BPMS/bpms/bin` に新しいファイルを作成し、`server.properties` という名前を付けます。

インストール情報

Oracle Enterprise Performance Management System 製品のインストールに関する最新情報は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Readme を参照してください。EPM System 製品をインストールする前に、この情報をよく確認してください。

サポートされているプラットフォーム

EPM System 製品のシステム要件およびサポートされているプラットフォームに関する情報は、Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix でスプレッドシート形式で提供されています。このマトリックスは、Oracle Technology

Network (OTN)の Oracle Fusion Middleware Supported System Configurations ページに掲載されています:

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>

サポートされている言語

EPM System 製品でサポートされている言語に関する情報は、Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix の「Translation Support」タブでスプレッドシート形式で提供されるようになりました。このマトリックスは、OTNの Oracle Fusion Middleware Supported System Configurations ページに掲載されています:

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>

サポートされているこのリリースへのパス

EPM System は、次のリリースからリリース 11.1.2.3 にアップグレードできます:

注意: アップグレードの手順は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の EPM System 製品のアップグレードに関する項を参照してください。

表 1 サポートされているこのリリースへのパス

アップグレード・パスのリリース: 元	リリース 11.1.2.3 へ
11.1.2.x	メンテナンス・リリースをリリース 11.1.2.3 へ適用します。 Oracle Hyperion Financial Close Management の場合、メンテナンス・リリースの適用がサポートされているのはリリース 11.1.2.1 および 11.1.2.2 以降のみです。
11.1.1.4.x	リリース 11.1.2.3 にアップグレード。
リリース 11.1.1.0.x から 11.1.1.3.x	リリース 11.1.1.4 にメンテナンス・リリースを適用してからリリース 11.1.2.3 にアップグレードします。
複数のリリースが含まれている環境。 1 つの Oracle Hyperion Shared Services のインスタンスが含まれている環境、または 2 つの Shared Services のインスタンスが含まれている環境も該当します	Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の EPM システム製品のアップグレードの章に記載されている、複数リリース環境からのアップグレードに関する説明を参照してください。

このリリースで修正された問題

このセクションには、リリース 11.1.2.3.000 で修正された問題が含まれています。以前のリリース間で修正された欠陥のリストを確認するには、Defects Fixed Finder を使用します。このツールで、所有している製品と現在の実装リリースを識別できます。1 回のクリックで、修正された問題の説明とそれに関連するプラット

フォームおよびパッチ番号を含むカスタマイズされたレポートが、ツールによってすばやく生成されます。このツールはこちらにあります:

<https://support.oracle.com/oip/faces/secure/km/DocumentDisplay.jspx?id=1292603.1>

- 14795937 -- 会計のタグが付けられた次元の場合、キューブ構築中に解決順が適用されません。変更を適用するゼロ以外の値を設定した後、この新しい値は保存されません。モデル・プロパティ・ウィザードを閉じてから再度開くと、値がゼロ(デフォルト)にリセットして表示されます。
- 16100032--Windows XP の場合、イタリア・バージョンの Essbase Studio コンソールでソート順が予期したとおりに機能しません。メタデータ・ナビゲータで次元要素のプロパティを表示中にソート順を選択できますが、表示を離れて再度戻るとイタリア語の「Crescente」のかわりに「Ascending」が表示されます。また、一度 Crescente または Descrescente (Ascending または Descending) が選択されて保存されると、イタリア語での選択に関係なく設定に戻ったときにソート順が元の英語「Ascending」に変更されます。
- 15955288--集約ストレージ・データベースの場合、MaxL 配置ステートメントを使用して、最上位レベルにユーザー定義メンバー、それ以降のレベルに次元要素を含んだ階層を(会計の外部に)作成する際に MaxL シェルが応答しくなくなります。
- 14180646 -- null 値を#MISSING としてロードする必要があるときに、Essbase Studio が Oracle Database の値"NULL"を 0 としてロードしています。
- 14311212 - Essbase Studio カタログの新しいバージョンへのアップグレードは、メタデータ説明フィールドに二重引用符で囲まれた文字列が含まれる場合、失敗します。

既知の問題

このリリースで注意が必要な既知の問題は次のとおりです。

- 16298982--Oracle Essbase が日本語 Linux で実行中の場合、ネイティブの日本語アプリケーションでアウトラインへの日本語文字のロードが非ストリーミング・モードで機能しません。**回避策:** かわりにストリーミング・モードを使用します。
- 16423924--週要素が「日付要素の作成」ダイアログ・ボックスから欠落しています。使用可能なオプションは、年、四半期、月および曜日です。**回避策:** 次の構文を使用して「キャプション・バインディング」および「キー・バインディング」フィールドに次元要素を手動で作成します。「キー・バインディング」には「拡張」を選択してください。

月の週を表すには:

```
'WM'( connection : \'tbc\'::'TBC.SALES'. 'TRANSDATE' ) . toString  
'WM'( connection : \'tbc\'::'TBC.SALES'. 'TRANSDATE' )
```

年の週を表すには:

```
'WY'( connection : \'tbc\'::'TBC.SALES'.'TRANSDATE' ) . toString  
'WY'( connection : \'tbc\'::'TBC.SALES'.'TRANSDATE' )
```

詳細は、Oracle Essbase Studio ユーザーズ・ガイドの次元要素の基となる式の作成に関する項を参照してください。

- 16435266--親/子列が含まれる場合、単一のテキスト・ファイルを使用して2つ以上の自己結合を作成すると失敗します。
- 16517700--server.query.skipValidation=true が server.properties に設定されている場合、ドリルスルー・レポートのユーザー定義 SQL の検証が正しく機能しません。無効なユーザー定義 SQL 文の検証で、「ユーザー定義 SQL は有効です」が誤って返されます。
- 16522882--11.1.2.2.000 から 11.1.2.3.000 へのアップグレード後、データベース・ソースの追加または再初期化コマンドの発行で JDBC ドライバ・エラー・メッセージが表示される場合があります。**回避策:** JDBC ドライバ・エラー・メッセージが表示された場合、Essbase Studio サーバーを再起動します。
- 16292007--Oracle RAC がデータ・ソースの場合、ODBC 接続文字列を使用した非ストリーミング・モードでのキューブ配置はサポートされません。
- 14625545 -- 次元要素が遅延キー・バインディングを使用して作成され、さらにそれらの要素が重複メンバー名サポートが有効な Essbase モデルで使用された場合、キューブ配置が失敗します。**回避策:** 次元要素で、「拡張」オプションを使用して手動で「キー・バインディング」を編集します。たとえば、TBC データベースを使用し、UDAMKTSIZE 列から作成された次元要素に対して自動的に表示される遅延キー・バインディングは次のとおりです:

```
class : \'tbc\'\'REGION\'\'REGION\'.'caption' || "_" || class :  
'tbc\'\'MARKET\'\'UDAMKTSIZE\'.'caption'
```

Instead, edit the key binding in the dimension element by using the Advanced option as follows:

```
connection : \'tbc\'::'TBC.REGION'.'REGION' || connection :  
'tbc\'::'TBC.MARKET'.'UDAMKTSIZE'
```

- N/A -- Integration Services カタログの移行は、64 ビット UNIX プラットフォームまたは Windows 2008 64 ビット・プラットフォームではサポートされていません。
- N/A -- Excel 向け Oracle Essbase Spreadsheet Add-in はネイティブのロケールで動作します。Spreadsheet Add-in がネイティブのロケールでデータを受け取らない場合、Essbase Studio で構築されたキューブのドリルスルーはサポートされません。
- N/A -- Essbase モデルで定義された変換ルールは、ドリルスルー操作のクエリー生成では使用されません。

回避策: 次元要素のキャプション・バインディングの式を編集してメンバーを変換できます。

- N/A -- カタログ・データベースが Oracle である場合: カタログ・データベースに接続する際に、Essbase Studio で ALTER SYSTEM コマンドが発行されなくなりました。パフォーマンスを向上させるため、Essbase Studio カタログ・ユーザーの Oracle データベース・ユーザー権限に ALTER SYSTEM ステートメントを追加してください。

推奨の設定は次のとおりです:

```
ALTER SYSTEM SET open_cursors=300 SCOPE=MEMORY
```

このカタログ・ユーザーは、構成時に Shared Services レジストリに指定されるもので、ALTER SYSTEM ステートメントの実行に必要な権限を持っている必要があります。

- 7665495 -- Essbase Studio では、特定のオブジェクトの名前が最大 255 文字に制限されます。オブジェクトは次のとおりです:
 - データ・ソース接続名
 - ユーザー定義テーブル名
 - 次元要素や階層などのメタデータ要素名
 - 別名セット
 - キューブ・スキーマ名
 - ドリルスルー・レポート名

Essbase アプリケーションおよびデータベース名に対する制限は次のとおりです:

- 非 Unicode の場合は 8 バイト
- Unicode の場合は 30 文字
- 6576813 -- Windows Vista では、JISX0208 および JISX0212 日本語文字セットにかわる JISX0213 日本語文字セットがサポートされています。Essbase ファミリの製品では、JISX0213 日本語文字セットはサポートされません。
- 7138321 -- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition データ・ソースに基づいた XOLAP 対応の Essbase モデルを配置できません。
- 7366645 -- Oracle Hyperion Smart View for Office または Oracle Essbase Spreadsheet Add-in を使用して Essbase Studio で構築されたキューブのクエリーを実行する際、ドリルスルー・セルの交差が基本メンバーと 1 つ以上の関連付けられた属性メンバーの両方で表されている場合は、そのセルのドリルスルーを実行できません。

具体的には、基本次元のメンバーと属性次元のメンバーによって表される交差(セル)に対してはドリルスルーが機能しません。

Essbase Studio でドリルスルー・レポートに交差を指定する際は、マルチチェーン階層内の基本階層と属性階層の両方を指定しないでください。ドリルスルーにはいずれかの階層のみを選択してください。

基本メンバーと属性メンバーを含む交差からドリルスルーを行う必要がある場合は、Oracle Essbase Integration Services を使用してキューブを構築する必要があります。

- 8661977 -- キューブを初めて配置する際に、そのキューブにテキスト・メジャーまたは日付メジャーが含まれている場合、データは正しくロードされます。そのキューブの後続の配置では、「既存データに追加」または「既存データから削除」オプションのいずれかとともに「データのロード」オプションを選択すると、データは正しくなくなります。

解決策: テキスト・メジャーまたは日付メジャーを除外し、数値メジャーについてのみデータを選択的にロードするには、カスタム・データ・ロード SQL を使用します。

- 8897922 -- OLAP メタアウトラインを Integration Services から Essbase Studio に移行する際、元の Oracle Essbase Integration Services のメンバー・セットに変換ルールとソート・ルールの両方が定義されていると、配置された Essbase キューブで階層内のメンバーが適切にソートされません。Essbase Studio では、Essbase モデル・プロパティで変換を実行しても問題は解決されません。

回避策: 次元要素のキー・バインディング式を編集することで、次元要素プロパティ・ダイアログ・ボックスで変換を実行します。

- 8908738、7127257 -- Microsoft Windows 認証は、Microsoft SQL Server へのデータ・ソース接続に対してはサポートされません。
- 9315569 -- 「ラベリング・ルールの編集」ダイアログ・ボックスにリストされるラベリング・ルールは翻訳されておらず、すべての言語に対して英語で表示されます。

「ラベリング・ルールの編集」ダイアログ・ボックスは、「カレンダー階層」ダイアログ・ボックスの「時間レベル」領域からアクセスします。このアクセス方法は、Oracle Essbase Studio User's Guide の時間レベルの定義に関する項に記載されています。

- 9325297 -- 可変属性は、履歴テーブルの FROM 列または TO 列の NULL 値をサポートしません。可変属性を使用する場合、履歴テーブルに FROM 列または TO 列が NULL 値である行が含まれていると、その行の属性値は属性次元に組み込まれません。

回避策: 履歴テーブルの FROM 列または TO 列に NULL 値がないことを確認してください。履歴テーブルの詳細は、Oracle Essbase Studio User's Guide の可変属性の履歴テーブルの設定に関する項を参照してください。

- 9326364 -- 2つの独立次元で1つの可変属性に対して同じリーフ・メンバー名がある場合、クエリー内のフィールド名が重複するというエラーにより配置は失敗します。

たとえば、可変属性次元 VARYPER と、2つの独立次元 Period および Year があるとします。Essbase モデル・プロパティの「独立次元バインディング」ダイアログ・ボックスで Period と Year のリーフ・メンバー名が同じ場合、配置は失敗します。

回避策: リーフ・メンバー名に使用される物理リレーショナル・テーブルの列名を変更します。これが不可能な場合、別の列名でユーザー定義テーブルを

作成し、このユーザー定義テーブルの列に基づく 2 番目の独立次元を構築できます。

- 9364712 -- キューブを非ストリーミング・モードで配置する(「キューブ配置でストリーミング・モードを有効化」チェック・ボックスをクリアする)場合、Essbase モデルが Unicode データ・ソースに基づいていると、配置に失敗します。

回避策:

- ストリーミング・モードを使用します: 「キューブ配置ウィザード」で、「キューブ配置でストリーミング・モードを有効化」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
- N-CHAR サポートが有効になっているデータ・ソースに対しては非ストリーミング・モードを使用します:

まず、次の方法で DSN を作成し、N-CHAR サポート・オプションを有効にします:

- Windows の場合、「ODBC データ ソース アドミニストレータ」を使用し、「N-CHAR サポートを有効にする」オプションを選択して DSN を作成します。このオプションは、「ODBC ドライバ設定」ダイアログ・ボックスの「詳細」タブにあります。
- UNIX または Linux の場合、odbc.ini ファイルを編集して新しい DSN を作成し、EnableNcharSupport の値を次のように設定します:

```
EnableNcharSupport=1
```

次に、「キューブ配置ウィザード」で次の手順を実行します:

1. 「Essbase サーバー接続オプション」ページで、「ODBC (ODBC DSN 名を入力)」オプションを選択し、作成した DSN を指定します。
2. 「キューブ配置オプション」ページで、「キューブ配置でストリーミング・モードを有効化」チェック・ボックスがクリアされていることを確認します。

「キューブ配置でストリーミング・モードを有効化」チェック・ボックスの使用方法については、Oracle Essbase Studio User's Guide のキューブ配置の章を参照してください。

- 9433391 -- テキスト・ファイルのデータ・ソースからの配置
 - テキスト・ファイル・データ・ソースからのキューブ配置が常に非ストリーミング・モードで実行されます。

Essbase Studio サーバーでは、テキスト・ファイルのデータ・ソースについては自動的に非ストリーミング・キューブ構築メソッドが使用されます; このため、ユーザーはこの内部ロード・メソッドについての指定を求められることや、通知を受信することはありません。
 - キューブ配置の進捗状況統計はテキスト・ファイルのデータ・ソースではサポートされません。

- 9477466 -- Smart View で、Essbase Studio ソースのキューブから Oracle Hyperion Financial Data Quality Management へのドリルスルーを実行する際に、関係するすべての製品(Workspace、Oracle Hyperion Provider Services、Essbase、Essbase Studio、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management)のセッションが期限切れになる前に EPM System のシングル・サインオン・トークンが失効すると、次のメッセージが表示されます: エラー: シングル・サインオンを使用するシステムへのログオン中にエラーが発生しました。管理者に問い合わせてください。エラー: 2067 - アプリケーションへのアクセス権がありません!

回避策: Oracle Hyperion Smart View for Office クライアントから Workspace に再度ログインします。

- 9492526、9502269-- 「キューブ配置ウィザード」で「ODBC (Essbase は ODBC 接続文字列を動的に作成)」オプションを選択した場合、Windows で OPMN を使用して Essbase を起動すると、Oracle BIEE データ・ソースから構築したキューブのキューブ配置が失敗します。

回避策: 配置を成功させるには、次のいずれかの回避策を取ります:

- 「キューブ配置ウィザード」で、OBI データ・ソース接続に対して ODBC DSN を指定します。詳細は、Oracle Essbase Studio User's Guide のキューブ配置の接続情報の指定に関する項を参照してください。
- キューブ配置ウィザードで「キューブ配置でストリーミング・モードを有効化」オプションを選択してストリーミング・モードで Essbase Studio サーバーを起動し、配置を実行します。
- 9561925 -- Solaris のみ: Essbase Studio サーバーの起動が失敗し、次のいずれかのメッセージがサーバー・ログ・ファイルに表示された場合、ユーザーのコンピュータのネットワーク構成に問題がある可能性があります:
 - カタログにサーバーを登録できません。
 - ネットワーク・エラーのため、サーバー登録の確認ができませんでした。

回避策: Essbase Studio カタログ・データベースの cp_server_key テーブルに空の行を 1 つ手動で追加します。

- 11663358 -- 日付属性のあるカレンダー階層を含むキューブは、大部分の日付属性が欠落しているため、キューブ配置中に正しく作成されません。(不具合 11696797 に関連。)
- 11696797 -- カレンダー階層の日付属性は、「Essbase モデル・プロパティ」ダイアログ・ボックスの階層の下に一部のみが表示されます。(不具合 11663358 に関連。)
- 13810033 -- Essbase Studio は Microsoft Windows プラットフォームで IPv6 プロトコルをサポートしていません。Essbase Studio が IPv6 プロトコルをサポートしているのは UNIX プラットフォームのみです。
- 14155099, 14462547 -- Essbase Studio の Netezza データ・ソース Essbase Studio で非ストリーミング・モードを使用して Netezza データ・ソースに接続できません。

回避策: 非ストリーミング・モードでは、データ・ソースへの接続は Essbase により行われ、Essbase Studio では行われません。データ・ソース・ドライバは

Essbase 構成ファイル(essbase.cfg)に指定されています。デフォルトで、一部のデータ・ソース・ドライバはデータ・ソース・エントリの先頭にセミコロンのコメント・インディケータがあると無効化されます。次の例では Netezza ドライバが無効化されています。

```
BPM_Oracle_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 Oracle Wire Protocol"
BPM_DB2_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 DB2 Wire Protocol"
BPM_SQLServer_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 SQL Server Native Wire Protocol"
;BPM_SQLServer_DriverDescriptor "SQL Server"
;BPM_Netezza_DriverDescriptor "NetezzaSQL"
BPM_Teradata_DriverDescriptor "Teradata"
;BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OHXXXX"
;BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server"
BPM_MySQL_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 MySQL Wire Protocol"
```

essbase.cfg を編集して、使用するデータ・ソースがリストされていることと、セミコロンのコメント・インディケータにより無効化されていないことを確認してください。

注： Netezza ODBC ドライバは Essbase サーバーが実行するマシンにインストールされている必要があります。

ヒントとトラブルシューティング

制限とガイドライン

Oracle Essbase Studio User's Guide(PDF および HTML フォーマット)には、Essbase Studio での作業時に生じる可能性のある様々な制限事項について説明した、Essbase Studio の制限事項とガイドラインに関する付録が含まれています。

このドキュメントの [13 ページ](#)の「[仮想メモリー設定の処理](#)」も参照してください。

Teradata データ・ソースへのデフォルト以外の接続の設定

Teradata データ・ソースに対するデフォルト以外の接続のプロパティを設定するには、server.properties に次の行を追加します:

```
server.jdbc.teradata.properties=property1=value1,property2=value2...
```

たとえば文字セット UTF16 を指定するには、次の行を追加します:

```
server.jdbc.teradata.properties=charset=UTF16
```

Essbase Studio クライアント・インストーラの言語の選択

Essbase Studio クライアント・インストーラでは言語を選択できますが、選択した言語とシステム・ロケールが一致しない場合、Essbase Studio の UI はシステム・ロケールの言語と一致し、インストーラで選択した言語とは一致しません。たとえば、インストーラを起動し、「英語」ロケールを持つシステム上で「日本語」言語を選択した場合、インストーラは日本語で表示され、Essbase Studio は正常にインストールされます。Essbase Studio を起動すると、UI は英語で表示されます。

カタログ URL プロパティの構文の確認

Essbase Studio サーバーが起動に失敗した場合、Shared Services レジストリ・ファイルの `catalog.url` プロパティをチェックして構文が正しいことを確認します。

構文が正しくない場合、Essbase Studio サーバーは起動しません。構文が正しくない場合、`server.properties` ファイルまたは Shared Services レジストリ内の `catalog.url` プロパティを更新して問題を修正します。その後、Essbase Studio サーバーを再起動してください。

注意:

- 詳細および例については、Oracle Essbase Studio User's Guide の `catalog.url` に関する項を参照してください。
- `server.properties` の設定は Shared Services レジストリの設定を上書きします。
- Shared Services レジストリの設定を表示または変更するには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide で説明されている `epmsys_registry` ユーティリティを使用します。

「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用した場合の `reinit` コマンドの実行

「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用して Essbase Studio リリース 11.1.2、11.1.2.1 または 11.1.2.2 をこのリリースに移行した場合、インストールおよび構成後に Essbase Studio カタログを更新する必要があります。カタログを更新するには、Essbase Studio コマンド・ライン・クライアントで `reinit` コマンドを発行します。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の Essbase Studio カタログの更新に関する項を参照してください。

XOLAP モデルの増分構築のサポート

制限事項とガイドラインの付録に、キューブ配置に関する制限事項とガイドラインの項の一般的な制限事項として、XOLAP 対応モデルの増分構築はサポートされていないという記述がありますが、これは誤りです。この記述は無視してください。

い。リリース 11.1.2.1.102 から、Essbase Studio で XOLAP 対応モデルの増分構築がサポートされています。

XOLAP キューブの Essbase Studio サーバーで生成された MaxL について

(11058371、11068896)

「キューブ配置ウィザード」でオプションを選択し、選択内容を MaxL スクリプトとして保存することで、MaxL の deploy ステートメントを生成できます。

XOLAP キューブを再配置する際、Essbase Studio サーバーで生成された MaxL を編集して配置設定を削除または変更すると、データに一貫性がなくなる可能性があります。

XOLAP キューブを再配置するために、Essbase Studio サーバーで生成された MaxL スクリプトを編集して配置設定を変更しないでください。かわりに、「キューブ配置ウィザード」を起動して必要な選択を行い、その選択内容を新しい MaxL スクリプトに保存することをお勧めします。

Essbase Studio ルール・ファイルでの MaxL の Import Dimensions ステートメントの使用

(7216055, 9034403)

Essbase Studio で作成したルール・ファイルから、MaxL の Deploy ステートメントを使用して Essbase にメンバーやデータをロードできます。このタスクは Deploy ステートメントを使用すると最も簡単に実行できます。

ただし、MaxL の Import Dimensions ステートメントを使用して Essbase Studio で生成されたルール・ファイルからメンバーをロードすることも可能です。Import Dimensions ステートメントを使用してアウトラインを構築する場合は、ファクト・テーブルまたはユーザー定義メンバーのみが含まれる階層からの会計次元の構築に問題があることに注意してください。このような場合は、データを正常にロードするために次の回避策を使用します。

回避策: MaxL の Import Dimensions ステートメントで呼び出せる、空のダミー・テキスト・ファイルを用意します。例:

```
import database 'tbc.MaxL1' dimension from local text data_file 'C:\dummy.txt'  
using server rules_file 'Account' on error append to 'C:\Hyperion\textUn1.log';
```

仮想メモリー設定の処理

(9460997, 9480016, 10415849)

Essbase Studio コンソールを実行しているマシンでは、オペレーティング・システムで指定されている範囲で仮想メモリー設定を大きくすることができます。

たとえば、Windows 32 ビット・プラットフォームでは、最大仮想メモリ設定は 2048MB です。

仮想メモリ構成の説明は、Oracle Essbase Studio User's Guide の仮想メモリの構成に関する項に記載されています。

Oracle BI EE データ・ソースに基づいたキューブの配置

(9492623, 10391499)

表 2 には、Essbase が OPMN によって管理されていると仮定した場合に、ストリーミング・モードまたは非ストリーミング・モードで実行されている Essbase Studio サーバーが Oracle BI EE サーバーとどのように統合されるか、および特定のオペレーティング・システムでストリーミング・モードまたは非ストリーミング・モードがサポートされているかどうかをまとめられています。また、さらに構成が必要な場合には、手順 2 の該当するサブ手順も示されています; 手順 2.1 や手順 2.2 がそれに当たります。

表 2 Essbase Studio サーバーと Oracle BI EE サーバーとの統合

Oracle BI EE のバージョン	非ストリーミング・モード server.essbase. streamingCubeBuilding=false	ストリーミング・モード server.essbase. streamingCubeBuilding=true
11.1.1.5 以降	<p>Windows: サポートされています</p> <p>essbase.cfg ファイルを変更してください。手順 2.2 を参照してください。</p> <p>UNIX および Linux: サポートされていません</p> <p>Oracle BI EE ODBC ドライバには、ORACLE_HOME などの共通の環境変数に競合があります。</p>	<p>Windows: サポートされています</p> <p>UNIX および Linux: サポートされています</p> <p>手順 2.3 を参照してください。</p>
10.1.3.4 以降	<p>Windows: サポートされています</p> <p>Oracle BI EE 11.1.1.5 ODBC ドライバが Essbase サーバーと同じマシンにインストールされている必要があります。手順 2.1 を参照してください。</p> <p>UNIX および Linux: サポートされています</p> <p>opmn.xml を手動で変更し、11.1.1.3 とは異なる適切な環境変数を設定してください。手順 2.4 を参照してください。</p>	<p>Windows: サポートされています</p> <p>UNIX および Linux: サポートされています</p>
10.1.3.3 以前	<p>Windows: サポートされていません</p> <p>UNIX および Linux: サポートされていません</p>	<p>Windows: サポートされています</p> <p>手順 2.5 を参照してください。</p> <p>UNIX および Linux: サポートされています</p> <p>手順 2.5 を参照してください。</p>

▶ 表 2 で必要とされている追加の構成を実行するには、次の手順に従います:

- 1 Windows の場合、非ストリーミング・モード(Essbase Studio コンソールでキューブ配置ウィザードの「Essbase サーバー接続オプション」ダイアログで「キューブ配

置でストリーミング・モードを有効化」を選択します。)Oracle BI EE ODBC ドライバがバージョン 11.1.1.5 で、Essbase サーバーと同じマシンに存在している場合、Essbase Studio はバージョン10.1.3.4.1 以降の Oracle BI EE データ・ソースからキューブを配置できます。

- 2 前出の表に記載されているように、使用しているオペレーティング・システム、Oracle BI EE のバージョン、および Essbase Studio サーバーをストリーミング・モードで実行するか非ストリーミング・モードで実行するかに応じて、次の手順を実行します:

1. セミコロンを削除して、;BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OHXXXX"の行のコメント指定を解除します:

```
BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OHXXXX"
```

2. 11g_OHXXXX を、「ODBC データ ソース アドミニストレータ」の「ドライバ」タブに表示されるものと同じインスタンス番号に変更します;次に例を示します:

```
BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OH449923612"
```

3. UNIX および Linux の場合、Oracle BI EE バージョン 11.1.1.5 以降に基づいてキューブを配置する場合は、ストリーミング・モードを使用する必要があります。
4. UNIX および Linux で、非ストリーミング・モードで Oracle BI EE バージョン 10.1.3.4 のデータ・ソースに基づいてキューブを配置する場合、次の環境変数を opmn.xml ファイルに追加する必要があります:

```
<variable append="true" id="LD_LIBRARY_PATH"
value="/.../prod1/OracleBI/server/Bin"/>true
id="LD_LIBRARY_PATH"
value="/.../prod1/OracleBI/web/Bin"/>
<variable id="SATEMPDIR" value="/.../prod1/OracleBIData/tmp"/>
<variable id="SAROOTDIR" value="/.../prod1/OracleBI"/>
<variable id="SA_ROOTDIR" value="/.../prod1/OracleBI"/>
variable id="SADATADIR" value="/.../prod1/OracleBIData"/
```

詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の Essbase と Oracle BI EE の統合のための環境構成 (UNIX)に関する項を参照してください。

5. Windows、UNIX および Linux で Oracle BI EE バージョン 10.1.3.3 に基づいてキューブを配置できるのは、ストリーミング・モードが有効化されている場合のみです。
- 3 UNIX で実行されている Oracle BI EE の ODBC ドライバ構成については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の Essbase と Oracle BI EE の統合のための環境構成(UNIX)に関する項で説明されています。

アップグレード中に発生するカタログ内の整合性のないオブジェクトに関するエラー

(11073948)

リリース 11.1.1.3 からのアップグレードで、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して構成している際、Essbase Studio に対するデータベースの構成タスクが失敗した場合は、次に示すような、カタログ内の整合性のないオブジェクトに関連するメッセージがあるかどうか、アップグレード・ログ・ファイルを確認してください:

Caused by:

```
com.hyperion.cp.cplutil.scripts.export_import.exceptions.ExportException:  
Inconsistent object in catalog. Please check the object form : \'Drill Through  
Reports\'\'Supplier\', object id : @44#0#101#0@.
```

重要: 11.1.1.3 リリース環境が実行されていて、Essbase Studio カタログが正常にアップグレードされるまで使用可能であることを確認してください。

このエラーは、ドリルスルー・レポートが依存しているデータ・ソース接続の名前を変更すると発生します。

ドリルスルー・レポート内の整合性のないオブジェクトに関連するエラーがある場合は、1つ以上のドリルスルー・レポートが無効であるため、Essbase Studio をアップグレードする前に修正する必要があります。次のいずれかのアクションを実行して、整合性のないドリルスルー・レポート(名前が変更されたデータ・ソース接続に依存しているドリルスルー・レポート)を修正してください:

- 11.1.1.3 環境で、データ・ソース接続を元の名前に変更します。
- ドリルスルー・レポート・エディタの「レポート・コンテンツ」タブで、新しい列値と、オプションでフィルタを指定して無効なドリルスルー・レポートを更新します。
- 11.1.1.3 環境から無効なドリルスルー・レポートを削除し、必要な場合は、アップグレードした Essbase Studio 環境に再作成します。

EPM System コンフィグレータを再起動し、データベース構成タスクを再実行します。

Windows 認証を使用して Essbase Studio サーバーを起動

(13562254)

Essbase Studio サーバーが Windows サービスとしてインストールおよび構成されている場合、Windows 認証を使用して、Essbase Studio サーバーをサービスとして起動することはできません。Windows 認証を利用するように Essbase Studio サーバーを構成するには、次の手順を実行する必要があります:

1. Essbase Studio サーバー・サービスがすでに実行されている場合は停止します。

2. `catalog.username` プロパティを、次のとおり `server.properties` ファイルに追加します:

```
catalog.username=
```

`catalog.username` プロパティにユーザー名やその他のテキストを追加しないでください。

3. 「スタート」メニューまたは `start_BPMS_bpms<instance>_Server.bat` ファイルを使用して Essbase Studio サーバーを起動します。

Oracle Advanced Security

Essbase Studio で Oracle データベースを使用している場合は、Oracle Advanced Security を使用して関連する Oracle JDBC ドライバを構成することをお勧めします。Oracle Advanced Security については、次のリンクをクリックしてください:

http://download.oracle.com/docs/cd/B19306_01/network.102/b14268/asojdbc.htm#i1006717

ドキュメントの更新事項

EPM System 製品ドキュメントへのアクセス

各 EPM System 製品ガイドの最新版は、OTN Web サイト(<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>)の「EPM System Documentation」領域からダウンロードまたは表示できます。EPM System Documentation Portal (<http://www.oracle.com/us/solutions/ent-performance-bi/technical-information-147174.html>)も使用できます。ここには、EPM Supported Platform Matrices、My Oracle Support、およびその他の情報へのリンクも含まれています。

配置関連のドキュメントは、Oracle Software Delivery Cloud Web サイト(http://edelivery.oracle.com/EPD/WelcomePage/get_form)からも入手できます。

個々の製品ガイドは、Oracle Technology Network Web サイトからのみダウンロードできます。

PDF からのコード・スニペットのコピーと貼付け

PDF ファイルからコード・スニペットを切り取って貼り付ける際、貼付け操作時に一部の文字が失われる場合があります、これによりコード・スニペットが無効になります。回避策: コード・スニペットを HTML バージョンのドキュメントから切り取って貼り付けます。

ドキュメント・フィードバック

製品ドキュメントに関するフィードバックを次の電子メール・アドレスに送信してください:

EPMdoc_ww@oracle.com

次のソーシャル・メディア・サイトの EPM 情報開発をフォローしてください:

- YouTube - <http://www.youtube.com/user/OracleEPMWebcasts>
- Google+ - <https://plus.google.com/106915048672979407731>
- Twitter - <https://twitter.com/HyperionEPMInfo>
- Facebook - <https://www.facebook.com/pages/Hyperion-EPM-Info/102682103112642>
- Linked In - http://www.linkedin.com/groups?home=&gid=3127051&trk=anet_ug_hm

アクセシビリティの考慮事項

オラクル社では、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントをご利用いただけることを目標としています。製品のアクセシビリティ・ガイドに説明されている、EPM System 製品サポート・アクセシビリティ機能。このガイドの最新版は、EPM System Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>)上のドキュメント・ライブラリを検索してください。

また、この Readme ファイルは HTML 形式でも表示できます。

データ・ロード用カスタム SQL 設定の検証をオフにする

新しいサーバー・プロパティ `server.query.skipValidation (true | false)` を使用してデータ・ロード用カスタム SQL 検証の設定をスキップできます。「データ・ロード設定の定義」ダイアログ・ボックスを閉じるために時間がかかる場合は、この設定を使用できます。カスタム SQL の検証をオフにするには、`server.properties` ファイルに `server.query.skipValidation=true` を入力します。

ユーザー定義クエリーに対するユーザー・データ・ソース権限の再構築

Essbase Studio からのユーザー定義 SQL クエリーでは、データ・ソース管理者は、データ・ソース・ユーザーが必要なテーブルのデータの読取り権限のみを持ち、それ以外の権限は持っていないことを確認する必要があります。これにより、権利のないデータにアクセスするクエリーをユーザーが実行する可能性がなくなります。

ストリーミング・モードの有効化

ストリーミング・モードを有効にするために `server.properties` 設定、`server.essbase.streamingCubeBuilding` を使用しないでください。かわりに、Essbase Studio コンソールで「キューブ配置ウィザード」の「Essbase サーバー接続オプション」ダイアログで「キューブ配置でストリーミング・モードを有効化」を選択します。「キューブ配置でストリーミング・モードを有効化」設定で、`server.essbase.streamingCubeBuilding` `server.properties` 設定が上書きされます。

新しいデフォルトの Essbase Studio HTTP ポート

Essbase Studio のデフォルト HTTP ポートは 9080 から 12080 に変更されています。

データ・ソース・ユーザーの権限の制限

Oracle Essbase Studio ユーザーズ・ガイドの制限事項とガイドラインに関する付録のユーザー定義 SQL 検証の項に、カタログとデータ・ソース・ガイドラインとしてデータ・ソース・ユーザーの権限を制限するのは Essbase Studio 管理者の責任ですという記述がありますが、これは誤りです。データ・ソース・ユーザーの権限を制限するのはデータベース管理者の責任ですと言い換える必要があります。

Teradata をデータ・ソースとして構成

▶ Teradata をデータ・ソースとして構成するには:

- 1 Teradata ドライバをインストールします。このドライバは、Teradata から取得する必要があります。
 - Essbase Studio では JDBC ドライバが使用されます。JDBC Teradata ドライバは、Essbase Studio サーバーが実行されているコンピュータにインストールする必要があります。

Essbase Studio では、JDBC Teradata ドライバを使用してストリーミング・モードでキューブが配置されます。

非ストリーミング・モードでキューブを配置するには、Essbase サーバーが実行するコンピュータに ODBC Teradata ドライバがインストールされている必要があります。
 - Essbase では ODBC ドライバが使用されます。ODBC Teradata ドライバは Essbase サーバーが実行するコンピュータにインストールされている必要があります。
- 2 Windows の「サービス」パネルから Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) サービス: EPM_epmsystem1 を使用して Essbase を停止します。
- 3 OPMN 構成ファイル(`opmn.xml`)をバックアップします。

例:

C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1\config\OPMN\opmn\opmn.xml

- 4 opmn.xml ファイルをテキスト・エディタで開きます。
- 5 Teradata ドライバを正しくロードするには、opmn.xml ファイルに Teradata ライブラリの場所を示すステートメントが含まれている必要があります。
 1. 次のステートメントを opmn.xml ファイルで検索します:

```
<variable id="ESS_CSS_JVM_OPTION7" value="-
Djava.util.logging.config.class=oracle.core.ojdl.logging.LoggingConfiguration"
/>
```

2. このステートメントの後に次のようなステートメントを追加します:

```
<variable append="true" id="PATH" value="C:\Program Files\Teradata
\Client\14.00\Shared ICU Libraries for Teradata\lib"/>
```

- 6 Essbase で Teradata データ・ソースを使用し、OPMN を使用して Essbase エージェント・プロセスを監視および制御する場合は、使用しているオペレーティング・システム用の次の変数で OPMN.xml ファイルを更新する必要があります。

注： 絶対パスの値にスペースを含めることはできません。絶対パスの値の例は 64 ビットのマシン構成に基づいています。

64 ビット Windows

次の変数を追加します:

- TWB_ROOT: Teradata ルート
- PATH: Teradata 共有ライブラリ
- PATH: Teradata クライアント DLL ライブラリ
- PATH: Teradata 呼出しレベル・インタフェース・バージョン 2 ルーチン
- PATH: Teradata メッセージ DLL ライブラリ

64 ビット Windows の例:

```
<variable id="TWB_ROOT" value="C:\PROGRA~1\Teradata\Client\14.00"/>
<variable append="true" id="PATH" value="C:\PROGRA~1\Teradata\Client\14.
00\SHARED~1\lib"/>
<variable append="true" id="PATH" value="C:\PROGRA~1\Teradata\Client\14.
00\TERADA~1\bin64"/>
<variable append="true" id="PATH" value="C:\PROGRA~1\Teradata\Client\14.00\CLIV2"/
>
<variable append="true" id="PATH" value="C:\PROGRA~1\Teradata\Client\14.
00\TERADA~1\msg64"/>
```

64 ビット AIX

次の変数を追加します:

- LIBPATH: Teradata ODBC ライブラリ
- LIBPATH: Teradata 共有ライブラリ
- LIBPATH: Teradata ODBC ドライバのロードに必要な ODBC コンポーネント
- LIBPATH: Teradata クライアント・ライブラリ
- COPERR: errmsg.txt ファイルが存在するディレクトリ
- NLSPATH: Teradata メッセージ・ライブラリ

64 ビット AIX の例:

```
<variable append="true" id="LIBPATH" value="/opt/teradata/client/ODBC_64/lib"/>
<variable append="true" id="LIBPATH" value="/opt/teradata/client/13.10/tdicu/lib64"/>
<variable append="true" id="LIBPATH" value="/usr/odbc/lib:/usr/odbc/drivers"/>
<variable append="true" id="LIBPATH" value="/usr/lib:/usr/teragss/aix-power/client/lib"/>
<variable id=" COPERR" value="/usr/libperion/essbase"/>
<variable id="NLSPATH" value="/opt/teradata/client/13.10/odbc_32/msg/%N"/>
<variable append="true" id="NLSPATH" value="/usr/lib/nls/msg/%L/%N"/>
<variable append="true" id="NLSPATH" value="/usr/lib/nls/msg/%L/%N.cat"/>
```

64 ビット LINUX

次の変数を追加します:

- TWB_ROOT: Teradata ルート
- TD_ICU_DATA: Teradata 共有ライブラリ
- NLSPATH: Teradata ODBC メッセージ・ライブラリ
- COPERR: errmsg.txt ファイルが存在するディレクトリ
- COPLIB: libcliv2.so ライブラリ・ファイルが存在するディレクトリ
- LD_LIBRARY_PATH: Teradata ライブラリ
- PATH: Teradata クライアント・ディレクトリ

注: errmsg.txt と libcliv2.so ファイルは、通常、同じディレクトリに存在します。したがって、COPERR と COPLIB 変数の値は、通常、同じです。

64 ビット LINUX の例:

```
<variable id="TWB_ROOT" value="/opt/teradata/client/13.10/tbuild"/>
<variable id="TD_ICU_DATA" value="</opt/teradata/client/13.10/tdicu/lib64> "/>
```

```

<variable id="NLSPATH" value="</opt/teradata/client/13.10/odbc_64/msg/%N > "/>
<variable append=true id="NLSPATH" value="/opt/teradata/client/13.10/tbuild/msg64/%N/
>
<variable id="COPERR" value="/usr/lib64"/>
<variable id="COPLIB" value="/usr/lib64"/>
<variable append=true id="LD_LIBRARY_PATH" value="/opt/teradata/client/13.10/tbuild/
lib64/>
<variable append=true id="LD_LIBRARY_PATH" value="/usr/lib64/>
<variable append=true id="PATH" value="/opt/teradata/client/13.10/tbuild/bin/>
<variable append=true id="PATH" value="/opt/teradata/client/13.10/tbuild/lib64/>

```

- 7 opmn.xml ファイルを保存します。
- 8 Windows の「サービス」パネルから Oracle Process Manager and Notification Server サービス(EPM_epmsystem1)を使用して Essbase を開始します。
- 9 次を検証します:
 - Essbase: 管理サービス・コンソールのデータ準備エディタを使用して、DNS を使用する Teradata データベースに接続します。
 - Essbase Studio: 非ストリーミング・モードでキューブ配置を実行します。これには Teradata ODBC ドライバが使用されます。

カタログのエクスポート/インポートに必要な管理者権限

Essbase Studio カタログ・データベースのエクスポート/インポートを実行するには、ユーザーが Oracle Hyperion Shared Services に管理者としてプロビジョニングされている必要があります。プロビジョニングおよび Essbase Studio の全役割の詳細は、Oracle Essbase Studio User's Guide を参照してください。

これまで文書化されていなかったドリルスルー・テンプレート SQL に関するルール

ドリルスルー・テンプレート SQL に関する次のルールはこれまで文書化されていませんでした:

- 次元交差値に関連付けられている事前定義済の変数と次元テーブルの列のすべてのペアが、ユーザー定義の SQL に含まれている必要があります。たとえば、次元 Product の交差は、標準 SQL テンプレートの次の式で指定されます:

```

$$Product-COLUMN$$ IN ($$Product-VALUE$$)

```

この式は、ユーザー定義の SQL テンプレートにも含める必要があります。

- ユーザー定義の SQL テンプレートでは、Essbase Studio サーバーによって生成された事前定義済の SQL テンプレートの別名と同じ名前を再利用する必要があります。

XOLAP モデルの増分構築のサポート

制限事項とガイドラインの付録に、キューブ配置に関する制限事項とガイドラインの項の一般的な制限事項として、XOLAP 対応モデルの増分構築はサポートされていないという記述がありますが、これは誤りです。この記述は無視してください。リリース 11.1.2.1.102 から、Essbase Studio で XOLAP 対応モデルの増分構築がサポートされています。

「Essbase Studio カタログおよびデータのアップグレード」の項への更新

(10383674, 10647506)

「Essbase Studio カタログおよびデータのアップグレード」の項が更新されました。Oracle Essbase Studio User's Guide の項を無視し、次の項を参照してください。

Essbase Studio のアップグレード

Essbase Studio をリリース 11.1.1.3 からリリース 11.1.2.3 に移行するには、アップグレードを実行します。リリース 11.1.2.x から 11.1.2.3 に移行するには、メンテナンス・リリースを適用します。

Essbase Studio のアップグレードまたはメンテナンス・リリースの手順は、Oracle Enterprise Performance Management System の構成プロセスの一部です。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。ガイドに記載されている順序で、使用している環境に適用可能なタスクを実行してください。

構成後、Essbase Studio で次のタスクを実行してください:

1. Essbase サーバーを移動した場合は、Essbase 接続が新しいサーバーの場所を指定するように、Oracle Essbase Studio User's Guide の再ホストされた EPM System 製品への参照の更新に関する項の説明に従って再ホスト手順を実行します。
2. Essbase Studio サーバーを移動した場合は、古いサーバーの場所を参照している配置済アプリケーションのために、Oracle Essbase Studio User's Guide のキューブ・リンケージの更新に関する項の説明に従ってキューブ・リンケージを更新します。
3. テキスト・ファイル・データ・ソースの場合:
 - Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータに指定されているデフォルトの EPM_ORACLE_INSTANCE/BPMS/bpms1/datafiles の場所を変更することで、以前のリリースからの場所、または Essbase Studio データ・ファイルのレプリケートされた場所を指定します。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。
 - Oracle Essbase Studio User's Guide のデータ・ソース接続プロパティの編集に関する項で説明されているように、任意のテキスト・ファイル接続の接続プロパティを編集して、テキスト・ファイルの新しい場所を指すようにします。

- 構成後、テキスト・ファイルを別の場所に移動する場合は、Shared Services レジストリの `server.datafile.dir` プロパティを編集し、テキスト・ファイルの新しい場所を指すように、任意のテキスト・ファイル接続の接続プロパティを編集します。Oracle Essbase Studio ユーザー・ガイドの `server.datafile.dir` に関する項とデータ・ソース接続プロパティの編集に関する項をそれぞれ参照してください。

Oracle Hyperion Shared Services レジストリを設定を表示または変更するには、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイドに説明された `epmsys_registry` ユーティリティを使用します。

4. Performance Management Architect 次元サーバーを移動した場合は、Oracle Essbase Studio User's Guide のデータ・ソース接続プロパティの編集に関する項の説明に従って、古いサーバーの場所を指定する Performance Management Architect 次元サーバー接続の接続プロパティを編集します。

これまで文書化されていなかったユーザー役割 cpDMDSAdmin

(11724835)

Essbase Studio のユーザー役割 cpDMDSAdmin は、これまで文書化されていませんでした。この役割には、Essbase Studio ビューア、データ・ソース管理者およびメタデータ管理者の役割のすべての権限があります。cpDMDSAdmin 役割名は、プロビジョニング時にデータ・ソース管理者およびメタデータ管理者の役割の両方が選択されたときに Essbase Studio コンソールのタイトル・バーに表示されます。

プロビジョニングおよびすべての Essbase Studio の役割の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。

接頭辞/接尾辞の変換を適用したときにメンバーの ソート順が一貫しない

(12815260)

次元要素にソート順が適用されており、Essbase モデルでその次元要素に基づいたメンバーに接頭辞または接尾辞の変換が適用されている場合、そのメンバーはモデルの配置後に正しくソートされません。

回避策: 基礎となる次元要素にソート順が適用されているメンバーに接頭辞または接尾辞の変換が必要な場合は、変換を追加する要素のキー・バイndィング式を編集します。この場合、Essbase モデルでは変換機能を使用しないでください。

たとえば、TBC データベースを使用し、次の階層を使用して製品次元を構築します:

FAMILY

キー・バイディング式に変換を適用する前に、次元要素プロパティを次のように設定します:

- 次元要素 FAMILY - キー・バイディングとキャプション・バイディングを PRODUCTDIM.FAMILY に設定し、列のソートを PRODUCTDIM.FAMILY に設定
- 次元要素 SKU - キー・バイディングとキャプション・バイディングを PRODUCTDIM.SKU に設定し、列のソートを PRODUCTDIM.SKU に設定

ここで、連結を使用してキー・バイディング式を編集し、接頭辞または接尾辞を追加します。

たとえば、PRODUCTDIM テーブルの SKU を接尾辞として FAMILY 次元要素に追加するには、下の太字のテキストをキー・バイディング式に追加します:

```
connection : \'TBC-oracle\'::\'TBC.PRODUCTDIM\'.'FAMILY'  
|| "_" || connection : \'TBC-oracle\'::\'TBC.PRODUCTDIM\'.'SKU'
```

Essbase モデルの再同期に関連した問題

階層内の基本チェーンを削除するとキューブの配置に失敗する

(12988552)

基本チェーンと属性チェーンを含むマルチチェーン階層で、基本チェーンを削除すると、Essbase モデルの再同期操作は成功しますが、このモデルのキューブの配置に失敗します。

Essbase モデルの再同期操作では、モデルの検証は行われません。再同期されたモデルにエラーがあっても、ユーザーには通知されません。したがって、モデルの検証を別途行う必要があります。そのためには、「Essbase モデル・プロパティ」ダイアログ・ボックスでモデルを開き、Oracle Essbase Studio User's Guide のモデル・プロパティの検証に関する項に記載されている手順を実行します。

階層の中間レベルを追加または削除すると属性設定が削除される

(13005538)

基本チェーンと属性チェーンを含むマルチチェーン階層で、属性チェーンの中間レベルを追加または削除し、モデルの再同期を実行すると、属性次元から属性設定が削除されます。

属性チェーンのレベルを追加または削除するたびに、モデルの再同期を実行し、影響を受ける Essbase モデルの属性プロパティまたは可変属性プロパティを確認し

て再設定する必要があります。また、キューブの配置を試行する前にモデルを検証することをお勧めします。

再同期は成功したように見えても、可変属性の設定が機能しない

(13601134)

可変属性に含まれる階層のリーフ・レベルを削除し、モデルの再同期を実行すると、再同期は成功したように見えますが、可変属性が機能しなくなります。この階層を使用するキューブの配置は失敗します。

前の項目(13005538)で述べたように、モデルの再同期を実行したら、影響を受ける Essbase モデルの属性プロパティまたは可変属性プロパティを確認し、必要に応じて再設定してください。また、キューブの配置を試行する前に必ずモデルを検証してください。

モデルの再同期をトリガーしない操作

(13706843)

モデルの再同期に関する項の、モデルの再同期が必要になる操作のリストの中に、誤った項目が2つあります。それらの操作は次のとおりです:

- スキーマの名前変更
- 階層の名前変更

キューブ・スキーマまたは階層の名前を変更しても、モデルの再同期は必要になりません。

ドリルスルー・プレビューの最大許容行数

(13633757)

Oracle Essbase Studio でドリルスルー・レポートをプレビューする場合、返される行の最大数は 1024 です。

注意: ドリルスルー・レポートのプレビュー(テスト)を行うには、ドリルスルー・レポート・エディタの「レポート・コンテンツ」タブにある「テスト」ボタンをクリックします。

Oracle BI EE ビジネス・モデル・オプションに基づいた Essbase モデルのデフォルト設定

(13578402, 16653895)

「ビジネス・モデル」オプションを使用して Oracle BI EE データ・ソースに基づく Oracle Essbase モデルを操作する際、データ・ソース接続の作成時に「キューブ・スキーマと Essbase モデルの作成」オプションを選択した場合は、「ASO ストレージ・モデル」オプションと「重複するメンバー名のサポート」オプションがデフォ

ルトで有効になります。必要に応じて「ASO ストレージ・モデル」オプションを消去できます。

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition データ・ソースからの配置は、「重複するメンバー名のサポート」オプションを使用して構築する必要があります。

Essbase Studio サーバーおよび Essbase Studio コンソールの開始と停止に関する項の更新

- この項では EASLaunch.properties ファイルが誤って言及されています。管理サービス・コンソールを Essbase Studio コンソールから起動できなくなったため、このファイルはインストールの対象から外れました。
- 13560119 -- スクリプトを使用して Essbase Studio サーバーを起動または停止するときは、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin にある .bat または .sh スクリプトのみを使用してください。

EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server にある .bat または .sh ファイルを使用して Essbase Studio サーバーを起動または停止しないでください。

Essbase モデルのメンバーに関する新しい「コメント」オプション・グループ

(13694485)

「Essbase モデル・プロパティ」ダイアログ・ボックスにおけるメンバーの「全般」タブで、これまでの「コメント」ドロップダウン・リスト・ボックス(コメントの手入力も可能)は次のオプションからなる新しい「コメント」グループに変わりました:

- 「コメント」 - メンバーについてのコメントを入力するテキスト・ボックス。
- 「外部ソースから」 - コメントを含む当該データベース列を選択するドロップダウン・リスト・ボックス。コメントはキューブ配置時にメンバーとともにロードされます。

メンバーごとに前述のオプションのいずれかを選択できます。

著作権情報

Essbase Studio Readme, 11.1.2.3.000

Copyright © 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。